

博士（文学）庄垣内正弘氏の『ウイグル
文アビダルマ論書の文献学的研究』に対
する授賞審査要旨

一九世紀末、中央アジア學術探検隊によって敦煌やタリム盆地周縁部より膨大な量の古文獻が発見され、それらは各国の図書館に蔵置された。それらは約二〇種類の言語で書かれているが、その中にウイグル語文獻が含まれており、仏典がその大部分を形成している。それらは漸く二〇世紀初頭以後本格的な研究の対象となった。

一般に仏教典籍は経律論の三蔵に分類され、経蔵は仏の教説、律蔵は仏教徒の生活規範、論蔵（阿毘達磨論書）は仏の教説を更に発展させて体系化した哲学思想を盛っているが、ウイグル語仏典の研究はその中でも、経典が中心で論書の方は顧慮される事が少なかった。

本書（二〇〇八年二月刊、松香堂）の著者庄垣内正弘氏は、一九七四年以来チュルク語研究の一環としてのウイグル語文獻の研究に従事し、その中でも特に一九〇七年 Aurel Stein が敦煌の千仏洞から将来したウイグル文「阿毘達磨俱舍論実義疏（Abhidhamakosa-

bhāṣya-ika Tatvārtha」以下「実義疏」と略す）」の研究に心血を注いで来た。斯くて一九九一年から一九九三年の間に「阿毘達磨俱舍論実義疏の研究」の題名の下に、その転写テキスト並びに日本語訳をファクシミリと共に三巻本として刊行し、それは国内外の学界に於いて高い評価を得た。

然るにその後、新たに中国所蔵のウイグル文「実義疏」（「甘肅本ウイグル文」と敦煌「北区石窟本」）の利用と、ストックホルム民族学博物館所蔵の二〇〇〇行を越えるウイグル文「阿毘達磨俱舍論」の参照が可能になった為、それらの新資料を綿密に参照することによって今回旧著を全面的に改訂増補するに至った。

ここに「実義疏」とは、説一切有部の学説を纏めた綱要書として名高い世親の「阿毘達磨俱舍論（Abhidhamakosa-bhāṣya）」への注釈書で、先立つ衆賢の「阿毘達磨順正理論」への反駁書として、六世紀に安慧（Suiramati）によって著されたものである。併し現存する安慧造漢訳「実義疏」は、冒頭に「惣二萬八千偈」と謳っているものの、実際には極端な節略本に過ぎず、ウイグル文の翻訳原典となっていたと思われる漢訳は現在なお見つかっていない。併しその膨大な内容は、このウイグル語訳と、一五―一六世紀に極めて劣悪な梵本写本から翻案されたそのチベット語訳とによって偲ぶ事が出来る。

ここに著者が対象とするテキストは、元朝期（一三五〇）に漢訳から重訳された文書であって、現存するウイグル語文献中最大の分量を有する。テキストは二冊からなる冊子体で、全体は七〇一五行よりなっている。その中の一冊は現在大英図書館文献番号 Or.8212-75A が付けられ、四五八五行より成っているが、「実義疏」第一巻の内容を完全に保存しており、とりわけ重要である。この一冊には更に四〇〇行を超える訂正文が行間に挿入されており、先の刊行本で著者はこの訂正文を基にしてテキストを作製した。

ところがその後、この一冊の内容が既述の「甘肅本ウイグル文」（卷子本写本）と重なることが判明し、それと比較した結果、訂正文には翻訳原典の内容から外れるところが多々あることが明らかとなった。そこで著者はこの一冊のテキストの全面的訂正を決意し、今回の改訂増補版となったのである。

元来ウイグル語は、語順その他の文法構造が比較的日本語に近いため、日本人には近づきやすいが、この文献のウイグル語は漢文の語順を模倣しているのみならず、そこに現れる仏教術語の多くも漢字を逐語的にウイグル語訳している為に、通常のウイグル語文法の知識を以ってしては、これを読み解くことが殆ど不可能に近い。そこで著者は、この文献中に現れる既述の「阿毘達磨順正理論」や「阿毘達磨俱舍論」などの漢文から、ウイグル文と対照できる引用文を

抽出して、まず漢語に対するウイグル「定訳術語」を考え、それを通して「定訳構文」を決定し、漢文の構文法を頼りに全体を訳出する方法を編み出した。この方法は著者の独創に關わる極めてユニークなものであったが、その後既述のストックホルム所蔵のウイグル文「俱舍論」写本（これは漢訳「俱舍論」と完全に一致している）の使用が可能となるに及んで、両者の対照研究からこの「定訳術語」「定訳構文」の項目は一気にその数を増し、ここより確実な基礎の上に訳文を完成する事が可能となった。

本書は全四章よりなる。その中先ず第一章は一三〇頁に亘って四節一六項目の下に、上に述べた様なウイグル語訳「実義疏」の問題点を選び出して、それらを系統的に論じている。

第二章 (pp.135-163) は「実義疏」以外の阿毘達磨論書としてロシア科学アカデミー東洋文献研究所蔵「入阿毘達磨論」の注釈と、ベルリンのトルファン学研究所が保管する「阿毘達磨俱舍論頌」注釈二点の校訂と研究に当てられている。

第三章 (pp.165-465) には、四五八五行より成る Or.8212-75A のテキストと翻訳が、見開きで対照できるように仕組まれて提示され、各頁は周到且つ詳細な注記に充ちており、正しく本書の中核を形成している。この中で著者は、ウイグル文中に挿入された漢語に見える梵語固有名詞の特殊な音写形式が、トカラ語を経由して導入

された事実を世界に先駆けて明らかにした。例えば中観派の巨匠「龍樹」(Nāgārjuna)は通常「那伽遏羅樹那」と音写されるが、ここでは「那伽遏主寧」(335: p.400)とウイグル字音を用いて音写されている。同様な事象は、「俱舍論」のウイグル語訳にも見られる。「具摩囉羅地」(p.576) = Kumaratā (童受・鳩摩邏多、矩摩邏多、拘摩邏邏多)】。

第四章は語彙リスト(pp.467-745)で、そこには「実義疏」と上記二つの阿毘達磨論書に現れる全語彙が、関連の熟語や例文と共に提示されている。二七五頁に及ぶこの部分はさながら「ウイグル語仏教術語辞典」の観を呈し、それが末永く言語学者、仏教学者座右の辞書として研究者に資するであろう事に疑いを容れない。

著者は本来言語学者として出発している為、この種の難解な仏典には元来不馴れであり、勢い仏教学、宗教学の専門家からみると幾つかの不備を指摘することが可能である。又、本書の題名に「文献学的研究」と謳っているが、言語学と文献学には互いに相覆う分野があるとはいえず、言語の *Naturseite* を扱う言語学と、その *Kulturseite* に重きを置く文献学の間にはなお微妙な差異のある事も事実である。

併しながら、ウイグル語文献中最大の分量を有し、難解中の難解とされてきた安慧造「阿毘達磨俱舍論実義疏」を、現在望み得る最

高の形に於いて分析整理し、その全容を極めて良心的に提示した事は、もとの橋瑞超と羽田亨によって創始された本邦のウイグル語研究の金字塔というべき成果で、世界に誇る斯学の到達点を示しているものと思われる。

以上の理由によって庄垣内正弘氏の本研究は日本学士院賞を授賞するに値する業績であると考えられる。